

子ども文化の詩学 (4)

遊び食べの体験

— 駄菓子文化が指示するもの —

森下みさ子

◆ 食べることと駄菓子

色とりどりのゼリー、ビーンズにザラ玉、紅色が鮮やかなさくら大根、口の中ではじけるわたパチにぶつとびチョコ、豆粒のように小さいプチ餅、それらしいにおいと味のビッグカツに蒲焼さん、

かさが多くて、得した気分になれるボン菓子にぶ菓子、大人を気取ったココアシガレットにパイプチョコ……。 「思い出の菓子」というと、世代を超えて、次々と拳がってくる駄菓子の数々。 「あれがあった」「これがあった」「こんなふうにして食べた」「クジが当たった」「店のおばさんにまけ



てもらった」「食べ過ぎて、親にしかられた」など、駄菓子について聞くと、その色や形や匂いや味と共に、遊びながら食べた思い出までがふつふつとよみがえってくるようだ。子ども時代のいつときと強く結びつき、子ども時代を彷彿とさせてくれる駄菓子とは、いったい子どもにとつてどのような魅力をもった食べ物なのだろうか。

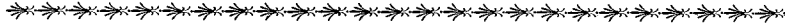
そもそも「食べる」ということは、生命の維持に必要な不可欠なことであり、「食べ物」は、大人から子どもへと、ほぼ一方的に与えられるものである。それはまもなく「食事」という社会的なルールや文化的な彩りの中に調えられていくが、それもみな、大人から授けられ、教えられて身につける、美意識や価値観を伴った作法であり、行為である。子どもの生命や生育に欠かせないだけでなく、その子が所属する社会や文化に深くかかわるものだから、与え手であり教え手である大人のこ

ントロール下に置かれるのは当然のことだろう。

お菓子にしても同様である。食事の間に与えられる軽食は、重すぎないように、甘すぎないように、栄養や衛生も考えた上で、手作りされたり選ばれたりして、子どもの口に入る。一日二食だった時代に、お腹が空きやすい子どもたち用の間食として発展してきたのが「おやつ」であったことを考えると、食事に比べれば子ども向けに用意されているとはいえ、大人のコントロール下にあることに変わりはない。むしろ、子どものために調えられるお菓子は、愛情に満ちた温かさや安心に包まれているといえる。その一方、駄菓子は同じ菓子類でありながら、まったく異なる要素によって作り上げられている。

#### ◆駄菓子の世界を彩るもの

現在に至るまで、比較的継続して売られている



駄菓子为例に、特色をまとめると次のようになるだろう。(例に挙げた駄菓子はほかの特色も併せ持っている。)

①色づけが鮮やかなもの

寒天菓子、ゼリービーンズ、ザラ玉、さくら餅

②極端に小さいもの

モロッコヨーグル、プチ餅、プチプリン、ヤン

グドーナッツ

③外見と中身がずれているもの

ぶくぶくたい焼き(チョココレート)

ピンラムネ(モナカと砂糖菓子)

プチプリン(チョココレート)

ガムめん(麵状のガム)

④本物らしい着色・香りがつけられているもの

ビッグカツ、蒲焼さん、酢だこさん太郎、うま

い棒各種、ベビースターラーメン

⑤大人用を模したもの

ココアシガレット、パイプチョコ(たばこ)

ワルガキビール(溶かすとビール状になる)

ジャックポーナスチョコ(老万円札の外装)

ソーシン(頭痛薬のもじり)

プチリングキャンデー(指輪状の飴)

⑥おもちゃと合体しているもの

フェラムネ、まけんグミ、ネリアメ、型抜き

⑦クジ付き、あて物

糸引きあめ、よつちゃんイカ、プチプチうらな

い

⑧刺激が強い、口に残るもの

わたパチ、ぶつとびチョコ、わさびのり、アカ

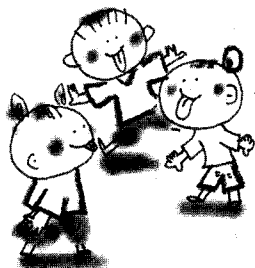
ベークロペー、超すっぱキャンデー

⑨昔なつかしいもの

きびだんご、きなこ棒、ぼんたん飴、カルメ焼

き、ふ菓子、タマゴボーロ、あんこ玉、ザラ玉

以上の特色が指し示していることは、駄菓子が



通常の食べ物・食事の価値観からことごとく逸脱していること、また、友達と遊びながら食べることを意図していることであろう。食欲をそそる自然な色や、食べやすい形や、大きさが崩されている(①②)のはもちろんのこと、栄養や健康とは無関係、通常の食の感覚からは、否定されるに違いない偽装やまがい物(③④⑤)が、むしろ、積極的に用いられている。遊びながら食べることは、通常の食事では禁じられているが、クジを引いたり、アタリハズレに沸いたり(⑦)、真っ赤に染まった舌を見せ合っては、刺激的な味を楽しんだり(⑧)、ジャンケンや型抜きを競ったりする(⑥)ことは、駄菓子には欠かせない

「遊び食べ」の要素である。しかもそれは、駄菓子が売られているその場で、そこにいる子ども同士で行われ、駄菓子屋の店主のほかは、大人の介在は一切ない。大人が調える通常の食事とは正反対ともいえる体験なのである。

#### ◆駄菓子体験が意味するもの

〈食育〉の価値観からすれば無意味とも思えるこの体験を、実は、かなり多くの人が記憶に留めている。現今の大学生(十八〜二十三歳)二百八名を対象にアンケート調査を行ったところ、二百六名が駄菓子を買ったことがあった。そのうち最もよく食べていた時期は「小学校低学年」(百十名)に集中しており、週に一〜三回ぐらいは、子ども同士(九十一名)で買いに行っている。この体験の頻度が指示するところは大きい。昨今、子ども文化に定着した携帯ゲームやカードゲームを

含めても、これほどまでに子ども時代に共有されている体験はないと思われる。しかも、この体験はわずかながらもお小遣いを与えられ、子どもたちだけで近所に買物に行くことが許されるようになった年齢にほぼ限られているのだ。子どもたちは手にしたお金で自分が欲しいお菓子を自分で選び、目で見て遊び、手でいじって遊び、口に入れて遊び、友だちとクジのアタリハズレや刺激的な味についてしゃべり、色のついた舌を見せ合っておりに集中して行われる体験なのである。

駄菓子屋での体験は、子どもの経済感覚を育てるとか、子ども同士の社会性をはぐくむとか、そこに課外の教育的効果を認める向きもある。確かに駄菓子屋体験は、口にする物を選ぶことを通して、親の保護から抜け出て、子どもだけのテリトリーを作り出す貴重な体験ともいえるだろう。駄

菓子の黄金時代といわれた一九五〇年代は、まだ、有害色素や不衛生な売り方が懸念される時代だったが、一九六〇年代も末を過ぎると「子どものオアシス」とか「(子どもが)自分で買える魅力」とか「小遣いで何種類も、おもちゃにもなる」など、むしろ、現代社会にあって、駄菓子屋の存在を珍重する扱いに変わってきている。有害物質や衛生観念にも目が配られるようになり、課外教育的な意義や懐かしさにも、焦点が当てられるようになって、駄菓子体験が評価され始めたといえるだろう。その経緯が、現大学生のほとんどが駄菓子体験を通過してくるといふ結果に結びついたに違いない。

しかし、ここで忘れてならないのは、これら教育的な意義を超えて、子どもたちを魅了してやまない駄菓子の力である。それは、必ずしも大人に認められやすい意味ではない。それどころか、大

人の目を逃れて子どもたちだけで行われ、大人が指し示す〈食〉の価値観を覆すように行われる、駄菓子と子どもたちとの間でのみ交わされる、密約に基づいた意味といってもよい。鮮やかな色やうそっぽい味や、当て物やまがい物を遊びながら食べるという食べ物とのかかわりに、大人はなんら意味を見出せない。しかし、子どもにとつては、その無意味こそが意味として輝いているに違いない。この連載の意図に即しているなら、子ども感覚に共鳴する「詩的作用」としての意味といえるだろう。

大人の目をかいくぐって、子どもたちだけが共有する、遊びに満ち満ちた駄菓子の世界、通常の〈食〉の文法をはずしたところに生まれる詩的な世界が、世代を超えて、子ども時代のいつときを彩ってきたと思われる。新しく案出された駄菓子に混じって、昔なつかしい駄菓子が健在(⑨)で

あるのも、各世代を通じて「子ども世界の詩的体験」が共有され、継承されてきたからではないだろうか。子ども時代のいつとき、大人の目からそれたところで、子どもであることの証のように体験される駄菓子体験に、私たちの文化は無意味の意味を感じ取ってきたのかもしれない。そうであるとするなら、昔ながらの駄菓子屋は激減したとしても、子どもたちの占有地として「遊び食べ」ができる場が、こっそりと、したたかに在り続けしてほしいと思うのは、私だけではないだろう。

(白百合女子大学准教授)

注

1 二〇〇七年六月に都内の大学と埼玉県の大学で合計二百八名を対象に行った「駄菓子体験アンケート」の結果の一部を引用。

2 一九六九年から一九八二年までの朝日新聞記事の見出しから抜粋。